

教壇より愛をこめて 「Campus Partner」の追加機能説明

塩田 公子

文学部文化情報メディア学科文化メディア専攻

(2003年9月18日)

From Platform with Love

Faculty of Humanities, Department of Humanities and Information,
Major in Cultural Studies and Information,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

SHIODA Tomoko

(Received September 18, 2003)

はじめに

私が、情報文化メディア学科の講義で利用している「教育支援システム」Campus Partnerは、2001年度から開発に着手し、今年度で3年目を迎えた。その間に実にたくさんの機能を追加して、よりよい教育効果を生むように努力をしてきた。

昨年度の本学の「日本語表現の基礎Ⅱ」の講義で利用し教育した結果を、本学紀要第32号(2003年3月発行)に掲載した。

その後も、講義での反省を踏まえ、さらなる可能性を追求して、さまざまな開発を加えてきた。今年度も、いくつかの機能を加えることによって新しい教育の工夫を試みることが出来た。これは2003年度の文化情報メディア学科、文化メディア専攻、書法メディア専攻の受講生たちが、講義中の様々な局面や課題に、真剣に取り組み答えてくれたことが大きな支えと励みになってできたことである。

教育現場で生きることを選び、教育現場の日々に一喜一憂して来た思いに支えられな

ければ、あらたな教育の方法や工夫はできないと思う気持ちがますます強くなっていくこの頃である。

私などは凡人であるから、自分の思いが常に中心で、他者も同じ思いだと単純に考えるし、年をとって学生たちの世代とははるかに考え方も変わってしまったことに容易に気づかず、ときとしてその落差を突きつけられ、あきれたり、怒ったり、最悪なことには教師としての立場をもって制圧しようとする。それは従来なら教育現場で当たり前風景であったのかもしれないが、現在ではそれは「アカハラ(アカデミック ハラスメント)」にされてしまうだろう。最近、「セクハラ」に対しては教育現場で構成員全員にたいして、セクハラ防止対策活動は徹底されてきている。今後「アカハラ」もそのような対処を迫られる日も、そう遠くは無いのではないだろうか。

考えてみれば、最高50歳の年の差のある教育現場である大学では、学生との年齢による考え方の違いはすこぶる大きいのであるから、何気ない一言も学生には強制力を持って

聞こえるに違いなく、心しなければと気持ち
を新たにする。

そのような変化する教育現場で、楽しく学
生と共に学び成長するためには、「やられ
た!」「まけるもんか!」「これでもか!」とい
う意気込みが必要なのだと自分に言い聞かせ
るのである。

本稿では、2003年度に Campus Partner に付
け加えた機能の説明を紹介するのが目的であ
るが、これは上に述べたように、変化する教
育現場で、よりよい教育をめざして苦心惨憺
していく過程で付加された機能であり、その
経緯を語ることは、最近の大学の教育現場で
の問題をあぶりだして行くことにもなるうと
思うので、そのような視点で書き記したもの
である。

なお、「Campus Partner」とは商標であるの
で、本稿の中では、以下「本システム」と表
記する。

1 あなた達!
シラバス読んでくれている?

シラバスは、おそらくどの大学でも同じだ
が、年度当初に恐ろしく分厚い冊子になっ
たシラバスが配布される。あれは本当に学生
たちにどれほど読まれているのか?

せいぜい利用するのは開講1~2週間で、
その後はまず見ないという実態があるから
である。あの冊子のシラバスはおよそ紙の無
遣いとしか言いようがない。しかもこれは
気のせい、年々分厚くなっていくような気
がするのである。

そのうえ、公式のシラバスの書式は、A4
の用紙1枚に収まるようにフォームができて
いるので、これでは、詳細に記すことは最
初から無理である。

シラバスに関してのジレンマはもっとあ

る。科目によっては、半期15回のプログラム
が毎回予定して書き込める訳ではないものも
ある。とくに演習科目は、その講義進行によ
っては、大幅に変更がありうるし、文化系
の演習科目では、担当者の興味や力量に左
右されるし、即興的に話題が生まれること
もある。

たとえば、今年度の「日本語表現の基礎」
の講義での例であるが、教材の中に出て
きた「ちちボーロ」という語がわからない
ので、調査しようということになり、本来
シラバスに予定していなかった調査、検
討の時間を必要とした。そして最後には、
「ちちボーロ」というお菓子を講義中に
全員で試食することになった。この事は、
別な稿で、教育実践報告として取り上げ
たので詳しくは省くとして、教師がより
よい教育効果が期待できると考えたとき
には、シラバスが書き変わるようになる
し、それを踏まえて次年度の講義の新た
な展開も生まれてこよう。

そこで、本システムの「講義ページ」に「講
義概要」の画面を設け、本学の公式シラ
バスと同じフォームに入力できるようにし
た。(図1参照)



図1

2002年度までは大学が配布するシラバスを
写真版で本システムの講義ページにアップ
ロードしていたが、講義は、当初予定の講
義プログラム通りに進行することは実際には
まずないし、対象学生の興味や、講義の展
開により、新しいプログラムが付加してより
よい

講義内容を目指して進展していくものである
ので、その都度必要に応じて、シラバスを書
き換えて学生に提示する必要が生じるからで
ある。

そうして、本システムの「講義概要」は、
講義の進行にあわせて訂正したり、講義中の
情報や、感想を付け加えていくことで、年度
末には、曲がりなりにも、講義を行った後の、
試行錯誤の講義実践ノートなるものにできあ
がっていくのはまた有り難いことである。

2 お願い！講義は休まないでね

教師側から言うと、出席は「とるものでは
ない」、学生側から言うと「とられるはずが
ない」というのが常識であった時代に私は大
学生活を送った。おそらく「語学」と特別な
講義を除いてはみなそうであった。

私の大学の教養部における指導教員は、近
世文学で著名な延広真治氏であったが、彼は
出席を決してとらなかつた。その理由を彼は
講義中にこう言っていた。「僕は学生という
のは講義にでていなくても、ちゃんと自分の
興味で勉強をしているものだから、僕は出席
をとらないのです。」どうやら『赤ずきんち
ゃん気をつけて』で庄司薫が1969年に第61回芥
川賞を受賞した時、履歴をみて始めて自分と
同期だと気づいたことによるらしい。庄司薫
は全然大学の講義に出ていなくて、真面目に
講義に出ていた延広先生は教室で庄司薫の姿
を見たことがなかったということであろう。
真偽の程はわからないが。

私はなんとなくこの物言いに共感して、大
学の教員になってしばらくは、講義で出席を
とらないということを信条にしていた時期が
あった。

出席などとらなくても、教師に魅力があれば講義など休まないのだと信じていたから
で、そのとおりに私は、延広先生の講義は1

年間休んだ記憶がない。それこそ「アリーナ
ー列目」で聞いていた。

話がそれるが、今はこの「アリーナー列目」
という言葉にも説明がある時代であろうか。
10年程前に、学生達が使っている「若者コト
バ」が話題になっていた時期があった。名古
屋の椋山女学園大学の人間関係学部の加藤主
税氏がまとめられた『名古屋発 女子大生が
集めた 驚異の若者コトバ事典』によると次
のようにある。

アリーナー列目

意味 最前列の意、他の列に比べて、先
生の指導率も高く他事をするこ
とができない席と言うことから、敬
意のこめられた造語。

とある。

延広先生は、その年は『好色五人女』が年
間テーマの講義で、初回の前説が「白木屋の
火事」。デパート白木屋が火事になった折、店
員の若い女性たちは着物で下着をはいていな
かつたので、羞恥心故に、高い窓から下へと
びおりる事ができずに焼死した、それ以来女
性の下着 スロース が普及したという話を
した。私などわくわくして聞いていたが、ど
うも先生の思惑は、初回からそのような話を
すれば、「きゃー。いやだわ」とばかりに詰
めかけていた女子学生がまず講義に来なくな
るのではないかと思っていたふしがある。い
くら30年前だと言っても、そんなことを恥ず
かしがるような学生はいなかつたと思うのだ
が。先生の思惑はなんであれ、私はその後も
「アリーナー列目」に席をとり、たのしく『好
色五人女』の講義を受けた。

その後もなかなかきわどい話もあつたのだ
が、「なんの！学問の場になんの遠慮がある
ものか」という精神は確実にこのとき私の心
に育っていった。

しかし、思えば、先生が出席をとらない理由も、本音は学生がいなくなってほしかったのではと最近になってしみじみ思うようになった。

たしかに真面目に聞いていてくれても、大勢の学生を相手に話すことは疲れる。エネルギーを使うこと甚だしい。まして現在の大学の現状は30年前よりも、もっと末期的にレジャーランド化している。しかし皮肉なことに、今では、そんなふうで学生を講義室内から減らしてしまうこと自体、教師の実力不足と思われ、講義アンケートで不満が多いレッテルを貼られることになるであろう。

ついでに、この「アリーナー列目」にはまだ話題があり、先に紹介した事典には教室の図まで付けられており、教卓の前一列のうち教卓の真ん前は「ロイヤルボックス」、その両側2つを「シルバー」、廊下側ドア付近の一番寒い席を「北極」というのだそうだ。

「ロイヤルボックス」とは

教室において、最前列の真ん中の席のこと、先生が一番近く、誰もすわりたくない特別な席、大変好ましくない意味で使う。

まさに、誰も座りたくない席に喜んですわり、「いなくなってほしい」と先生が念願して「これでもか!」と仕掛けてくる話を、うれしそうに一日もやすまずに聞いていた私は、まさに「へんな学生」だったのかもしれない。

ところが、最近は出席チェックを厳しくしなければいけない時代になったようだ。ほっておけば水と同じで安きに流れるし、ことに本学のように駅から遠く、交通が不便な場所にあると、通ってくるだけでも大変で、出席をとらない講義だと思わず出来心で休んでしまいたくもなろう。それでも一生懸命通って

来てくれる学生には、「ごくろうさん!」の一言ぐらいかけなければ申し訳ないというものだ。

しかも、最近は学期末に失格にならないように、学生は自分の出席日数を自己管理することには結構気を遣うのである。

これも私などにはちょっと理解できない発想であるが、まぎれもない現実である。授業を楽しみ、継続して先生の話を書き添えてこそ価値があれ、何らかの事情(事故)で講義を休まねばならないときは、その休んだ時間にどのような楽しい、かつ心躍る話が聞けたかもしれぬと思うと、講義を欠席するときはまさに後ろ髪引かれる思いであった。

それなのに今時の学生は「失格直前までは休むことも権利!」とばかりに欠席する。むしろそんな不心得な人ばかりでもない、昨今は特に就職活動をしている4年次の前期などは、講義にもおちおち出でられない実態は厳然とある。それは百歩ゆずっても、出席もとらないで放置しておけばよけいに休むに違いない。しかも、堂々と試験前になると「私、何回休んでます?」「まだ大丈夫ですよ?」などと聞きに来る。

「私は、あなたの日記帳じゃないよ!」と言いたくなる。「自分の情報管理ぐらい自分でしてください。」

ということで、講義ページに「出席簿」画面をもうけたのである。(図2参照)

以下その概要と、利用法について記す。

- 1 前期・後期別に学生の出・欠・遅刻の情報を管理する。
- 2 出席簿の学生リストは、講義受講を決めた段階で、学生が時間割設定をすると、自動的に教員の講ページに受講生全員のリストが作成される。
- 3 学生個人の講義ページの出席簿には本人のみの出席簿が表示される。

図2 「日本語表現の基礎」出席簿

ただし、この出席簿のチェックは、教員が教員講義ページでチェックの入力を行う方法しかないので、講義中に点呼等の別な形で出欠をとってから本システムに入力をしなければならないという煩雑さが伴う。少人数の場合は講義中でもチェックは可能であるが、受講生が多数の場合はとても大変である。その点が今後の開発の検討課題ではないかと考える。学生が確実に講義時間内に個人でチェックをした出席データが自動的に教員ページの出席簿に生かされるシステムにすればよいのであろうが、これは全員がパソコンを携帯するか、情報教室でパソコンに向かっているという環境が必要になるわけである。

本システムに「出席簿」ページが出来た事による利点としては、学生は自分の出欠状況を知ることができるので、学期末の試験等で出欠が問題になる場合にも、そのときになって煩雑な問題が起こることもないのである。

次に、出席簿を管理していて、とくに学期末に成績をつける場合、レポートや試験の成績と出席日数とを勘案しながら評価をだすというのが、最近の常識であろう。

一昔前は、出したレポートさえうまく出たていれば、欠席が多くてもあまり影響はなかった頃もあったのであろうが、やはり半年間、力を抜かずにつねに前向きで頑張った姿勢は評価されなければならないと考える。

そこで、本システムを用いた講義では、平常点を重視する意味もあって、毎時間のように小さい課題を出すようにしている。

「講義ページ」の「レポート出題」の機能を使って、教授者がレポートの題を出すと、それが学生のページに示されて、学生がそれに従って作成したレポートを、「講義ページ」から教授者に提出する機能は、すでに本システム開発当初から組み込まれていた。

しかし、実際に運用してみて、毎週のようにレポートが出た場合、受講生全員がかならず次のレポートが出題されるまえに送ってくるとは限らず、ためにためた挙げ句、複数のレポートを一気に「それ！」とばかりに送ってくる学生もいれば、最初の頃のレポートを忘れたまま、学期末に催促されて送ってくる学生もいるので、学期末に成績をつけるときに、教師の側にとっては、提出されたレポートを整理しなければならないという煩雑さが生じるようになった。

そこで、「出席簿」の画面からクリックして、「レポート採点一覧表示」(図3参照)

図3

があらわれ、教員が出したレポートが、各受講生毎に一覧できる。また、この画面で、受講生の氏名をクリックすると、「課題レポート個人別採点表」(図4参照)が見られる。また、同じように講義回の数字をクリックすると、そのときに出した「レポート名」「課題内容」と「提出期限」その他詳細が表示され、(図5参照)、その下に受講生全員の採点と提

課題レポート名	点数	提出日	最終採点	備考
英語1(英語入生)19年度	未	2003/04/24 09:05	2003/04/24	
英語1(英語) 英字記載済みです	未	2003/07/21 19:32	2003/06/21	提出期限切れ
英語1(英語) 英字記載済みです	30	2003/06/06 10:37	2003/06/20	提出期限切れ

図 4

名前	点数	提出日	備考
大和麻衣(2年)	100	2003/04/24 09:57	
栗山典子(2年)	未	2003/04/24 09:35	
藤原祥登(2年)	未	2003/04/24 09:35	

図 5

出日とが表示される。

この機能がまだ無い頃は 講義ページの「レポート提出一覧」をすべて参照して、提出の有無を確認しなければならなかったもので、この機能追加で、非常にスムーズに、かつ間違いなく成績処理ができるようになる。

しかも「総合評価表」をクリックすると(図6参照)のように、出席、レポート、期末試験の総合評価を集めた、「総合評価一覧表示」が現れる。

つまり、毎回の講義が終るたびに、出席のチェックを行い、提出された課題を教員側も1週間以内にこなし、そのつど評価をシステムに入力しておれば、学期末試験後に従来の

氏名(学年)	学籍番号	総合評価	出席状況(出席回数/総回数)			レポート提出状況		レポート評価		期末試験結果	
			出席	欠席	遅刻	提出済	未提出	評価	評価	満点	合格
大和麻衣(2年)	2002241001	未評価	0	0	0	2	0				
栗山典子(2年)	2002241003	未評価	0	0	0	2	0				
藤原祥登(2年)	2002241004	未評価	0	0	0	2	0				
下村麻衣(2年)	2002241005	未評価	0	0	0	2	0				
藤田麻衣(2年)	2002241009	未評価	0	0	0	2	0				
山田麻衣(2年)	2002241010	未評価	0	0	0	2	0				
山本麻衣(2年)	2002241011	未評価	0	0	0	2	0				
青木麻衣(2年)	2002242001	未評価	0	0	0	2	0				
佐藤麻衣(2年)	2002242002	未評価	0	0	0	2	0				
木下麻衣(2年)	2002242003	未評価	0	0	0	2	0				
鈴木麻衣(2年)	2002242004	未評価	0	0	0	2	0				
中嶋麻衣(2年)	2002242010	未評価	0	0	0	2	0				
藤原麻衣(2年)	2002242011	未評価	0	0	0	2	0				

図 6

ようにあたふたとしなくても良くなるはずである。(少なくとも私はそうである、無論そんなことが無くても、きちっと情報管理が出来ている教員の方が多いのだろう)

ただし、これらの一覧ページは、教員が提出された学生の課題をつねにチェックし、送り返すか、採点をしておかないと、このページの、「点数」や「評価」に「朱文字」で「未」(未採点)と現れる。今も昔も「朱」は心痛む色である。

「学生に要求する以上、先生もちゃんとやってください!」という学生の声聞こえてきそう。

3 私を見て!!どこ見ての!なにしているの!

最近は「体験型授業」の必要性が声高に言われ、従来の大学の教室で行われていた、一方通行の講義主体の授業形態は、ややもすると批判の対象にならないまでも、なんとなく肩身が狭い思いがするし、授業評価でもよい評価がとれないらしい。たしかに私の学生のころは、一方通行が悪いとは思ったこともない、教師の言うことを一字一句聞き漏らさないようにと気を張っていても、難解な物言いや、新しい知識、耳慣れぬ表現などはたくさん残る。ひいてそれは、自分が知らないことをまた覚えたという喜びに胸がおどったのだから、こちらから「おおそれながら」と質問などするには、「まだ未熟で10年早い!」と自覚ができるほど、大学の教壇で教師が語る内容は豊かで、知識欲を啓発するのに十分な講義であった。

今の学生たちに一言言わせてもらいたい、「わかってとする努力が足りないんじゃないの!」

「わかって」と努力する以前に、「聞いてもすぐにイメージがわからないこと」聞いてい

るうちにわからなくなってくる難解な内容」はそれを理解できない己の罪ではなく、理解できないような不可解、かつ耳障りな話を発する側の問題として、堂々と教師を告発せん勢いで、「わからなーい!」という顔をし、とたんに目の色をうつろに変化させるのがなんと上手なことである。

言いたいことは、まだまだあれど、しかし、「これが時代の流れというものだ。」と覚悟を決め、この報告レポートの最初に書いた「がんばり続ける教師」の心構えに戻ろう。

そのような現状認識のもとに、つまりはこの二年間本システムを開発し、一方通行の講義ではなく、参加する講義を目指して及ばずながら努力してきたのである。だがしかし、今年になってなんだか、講義中に無性にわけのわからない「いらだち」を覚えることが度重なるようになった。

私の方を誰も見ていないことに気づいたのだ。これは従来、学生の瞳をひたすら受け止め、まるで、そう!満場の視線を一身に集め舞台上で32回のフェッテを踊るオディールのよう(いや、そんな例えは面はゆいな、しかし、気分はまったく私が主演。)そうなのだ、長い間大学の教員はこの「舞台の上で脚光を浴びる主演」を楽しんできた。しかし、もう主演を学生に渡してしまった、そのそこはかたない寂しさを感じたのに違いない。

私 : みなさん、ちょっと聞いて!

学生達 : うるさいねー、聞こえているわ。

(とってるらしい、無論顔も上げない。)

私 : ちょっとこっちみてよ!

学生達 : みたからってなにがあるのよ、あっても先生の顔でしょ!(と言いたげな目つきで、10パーセント

ぐらいの学生が顔を上げる)

私 : ねえ、ちゃんと私の言うこと聞いてる?何してるの?

学生達 : 聞いてますよ。(これは声に出して言う。)

私 : でもあなた、パソコンの画面みてるでしょ、ひょっとしてインターネットやってるんじゃないの?

(といていやらしくも一人の学生にちかずきパソコンをのぞき込む私。)

学生達 : 違いますよ、先生のいっていることノートとっているんですよ。

((注)たまには、こっそり講義をきかずインターネットをやっている不心得者もいるにはいる。)

つまりは、学生は私の言うことをパソコンに打ち込んでノートしているらしいのである。

現在の大学生には不満ばかりを感じている私であるが、この事だけは学生に脱帽である。

情報機器に日々すみやかに対応していける若い学生たちにとっては、すでに従来の「ノート」に「鉛筆」で書く行為以上に指がキーボード上を動く事のほうが容易い事であるようだ。携帯メール一つとっても、あの驚くべき早さ!!である。

情報文化メディア学科になり、私の講義はすべて個人のノートパソコンを携帯して行うようになった。本システムを用いて、講義資料を参照したり、各自のアップロードした提出物を画面に表示して教科書代わりに使っている。

つまりは、「講義ページ」では、教材を「紙媒体」ではなく「ウェブ」上で表示することで「読む」ことを共有する。また「レポート提出機能」で「書く」ことを、「講義の広場」

という交流ページを用いて、感想を述べたり、友人に話しかけたりという、「話す」ことの手段に利用してきた。「読む・書く・話す」の基礎的な表現方法を本システムで広く対応できるように、開発を進めてきた。

ここで新たに講義の記録として講義中に「書く」こと、つまり「個人ノート」ページとしての機能を付加する必要を感じたのである。

たしかに、パソコンに向かうと、ノートをとらねばならないとき、ノートはどこに置くのか？右利きはパソコンの右側に、左利きは左側に、いずれにしても体がねじれて、書きにくい。

なによりも、キーボード上におかれた指に鉛筆を持ち換えるのが煩雑なのだ。

そこで、「二画面表示」機能を本システムに付け加えることになった。(図7参照)

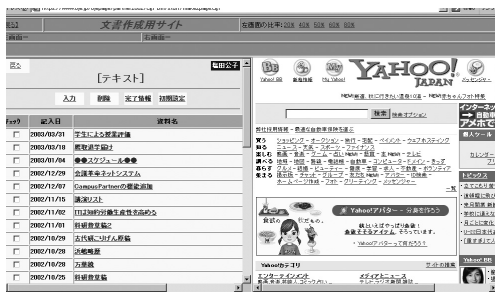


図7

「二画面表示」とは「参照画面」と「編集画面」を同じウェブ上に表示する。片側にテキストや、他の資料を表示し参照する「参照画面」と、もう片側の画面に講義のノートをとることに利用することができる「編集画面」の「二画面」である。「参照画面」は、個人ページの「テキスト資料」、「ファイル資料」等はもちろんインターネットのサイトなども表示できる。

この2年間本システムを用いていた間、思い起こしてみると、学生たちは、だれも片側にノート、ファイル、レポート用紙などの紙

媒体をおいていなかったようだ。

おそらく本システムをみながら、パソコンでワードをたちあげて、ノート代わりに打ち込みながら、画面をいちいち切り替えて使っていたに違いない。

ただし、この「二画面表示」は実際の運用が、前期講義には間に合わなかったので、後期から使っていくことになった。

後期は「エクステンション講座」で「パソコンで読む日本の古典」という講座を一般向けに開講する。この「二画面表示」を利用して、片側に『伊勢物語』や『源氏物語』の写本を表示して、片側の画面でそれを通行の文字表記になおして入力し、編集するという講義をしてみようと計画している。古典作品の写本は現在多くの影印本が出版されているが、大学の講義などの教科書に使う以外には、巷では容易には入手しにくい。しかし一般の人たちで写本に興味のある人はかなりいると思われるし、書道などに興味をもつ人たちも「写本」を読むことは楽しみであるはずである。それを、パソコン入力しながら、読み解くのは考えただけでもわくわくする。

写本を通行の文字表記に変えて各個人の独自のテキストを作成したら、今度はそれを、「参照画面」に移し、それを教科書にして、「編集画面」をノート代わりに使い、注釈や、感想を書き込むという計画である。

しかし、もうココまで出来るようにこのシステムを便利にしてしまったら、ますます学生達に、「私を見て！どこをみているの？」とは言えない・・・とうとう自分で自分の首を絞めてしまったか！！

4 ぐずぐずせんと自分の意見ぐらい言いなさい！

このように、学生たちは教育現場で着々と

主役の場を獲得しつつある。そして教師達は、学生の顔色を見て、何を欲しがっているのか考えて、「こっちへおいで、転ばないようにね」などと優しく手をさしのべて、ころもとなない学生たちをじっと我慢で見守って「満足してくれて良かった、また来てね」とにこやかに手を振る。うーん、これでいいのだろうか！

しかし、最後に言わせてもらいたい。参加型、体験型講義には、すくなくとも参加するすべての者に、自己認識と自己表現の責任があるということである。

講義中、学生達は、教員が話している時はもちろんのこと、教員の問いかけに答える場合でも、パソコンのディスプレイから顔をあげない。こういう学生の実態はまた別な観点から教育現場の問題として取り上げなければならないと考えるが、パソコンに向かった学生たちの新たな習性と、チャットや携帯のメールのやり取り、ウェブサイトの掲示板などで上手にお話出来る学生達の得意技を、講義に活かさないほうは無いではないか。

積極的にこの方向に開発をすすめたのが、「討論の広場」という機能である。(図8参照)

No.	テーマ/種別	件数	最新記事	最終更新日時
1	授業の点	14	11/11	02/26 11:41
2	感想	6	11/04	2/01 22:16
3	分からない	2	11/04	02/16 12:01

図8

これは、各「講義ページ」にあり、講義中における「質疑応答」「意見交換」の機能である。平たく言うと、「チャット機能」を利用して、講義中の意見交換をしようというのである。

この機能はすでに、前期の「日本語表現の基礎Ⅱ」の講義で3回利用した。

6月のとある朝、

私 : あーあ。梅雨だね、いやだね。みんななどー思う？

学生達 : しーん (パソコンの画面から顔をあげない)

私 : でもさ、今年はどかっと降って、からっと晴れるみたいだね、こういうの男型っていうんだよ。でもそういうネーミングは差別だよな。

学生達 : それでもしーん。(だれに話しかけてるのよ？指名されてないんだから、誰が答えればいいかわからないでしょう！とでも言いたげな顔！顔！顔！)

「ようし、それならば、今から一人ずつ『梅雨』への思いを聞いてあげよう。全員答えて！」

ということが、この機能を使うと、教員側としては、非常にスピーディーに無駄なく学生達全員の意見を聞くことが出来、学生達の側からは、全員が考えること、答えること、表現することに参加することが出来るのである。

従来の教壇でも教師が、発問したり、感想を求めたりするが、一人が意見、感想を述べるだけでも数分を要するはずである。しかも人前で発言をしたがらない学生も多く、指名して発言を求める行為は、大学の教壇ではほとんど儀式にすぎないのではと徒労に思うこともあった。実際に休み時間や、通学のバスの中では驚くほど話上手な学生達(とくに女子学生)が、講義室に入ると、とたんにわずかに単語を発するのみという状態になる。あなたは、一時話題になったけど、「めし！、風

呂！、寝る！」のお父さんか？

ところが、この機能を利用すると、教員がテーマ設定の折に、必要な条件を示して入力して時間を適当に設定すれば、全員が同時に作業できるし、入力が早かった学生の意見が隣に表示されるので、それを見て自分の意見をまとめたり、同意したり、反論したり、自分の意見と照らし合わせて入力したり、一度入力した後で、友達の見解に反論を書き込んだりと、講義の時間が大変有効に使え、受講者全員が参加できる授業展開が可能であるということである。

「討論の広場」というネーミングは今ひとつピンとこないが、とりあえずは主役の座を学生達に明け渡した教員の世代の残照のような響きがする。せめてこれぐらいは残しておいてもらおうか。

おわりに

今回紹介した新しい機能は、今後もたゆみ無く講義の中で利用し、それぞれの成果を確実に出してゆくことで、より使い勝手の良いシステムを目指して行きたいと考えている。

学生達よ、先生は『教壇より愛をこめて』だよ。

注

- 1 延広真治氏は、名古屋大学から東京大学に移られ、定年退官後現在は、帝京大学の教授である。
- 2 『名古屋発 女子大生が集めた 驚異の若者コトバ事典』
平成5年8月25日発行
編著者 加藤主税 那須田友美 安田めぐみ